

3 ただ一つこれただ一つなし得べき道とは知れど心おくれぬ

橘糸重 (明治六〜昭和一四)

東京音楽学校教授・ピアニストとして活躍した作者だが、短歌作品は孤独や鬱屈した心情を託つものが多い。引用歌やへなりはひはかなしかりけりあやまちてピアノひく人となりしいくとせには、屈折した思いが覗く。へかなしさの限をききて別れ来しその夜おぼゆる雨の音かなへわた中の人なき島に一人すみて命のかぎり君を待たましには、恋の面影が偲ばれるようにも。いずれの作品も『橘糸重歌文集』(平成二十一年)所収。(河野)

4 たてよこにうねりくねれる学者町小さき家に人にかしづく

大塚楠緒子 (明治八〜明治四三)

女性作家の先駆け、日露戦争下での厭戦詩「お百度詣で」の作者として知られる楠緒子は、明治二三年弘綱に師事。死後信綱に就き、旧派新派が入り混じる歌壇で活躍した。歌集は残さず、掲出歌は「心の花」明治四三年二月号による。才能とそれを発揮する境遇に恵まれた楠緒子だったが、伝統的な良妻賢母の足枷からは逃れられなかった。「うねりくねれる」に屈折した心情が読める。夫は美学者の大塚保治。夏目漱石の思い人としても有名。(清水)

5 わが側に人ゐるならねどゐるやうに一つのりんご卓の上に置く

片山広子 (明治二一〜昭和三二)

へよろこびかのぞみか我にふと来る翡翠の羽のかるきはばたき等を含む瑞々しい第一歌集『翡翠』は大正五年の刊、広子は三十八歳だった。掲出歌は昭和二九年、七十六歳での第二歌集『野に住みて』所収。翻訳家松村みね子としても大きな仕事を成した理知の人が、戦中戦後の厳しい時代、老いゆく己の生をどのように歌で支えていたかが窺える。孤高を保ちながらも遠い灯火のように人を恋う心は、終生変わらなかつたのではないか。(梅原)

6 紫禁城を仰ぎて行けば陽は澄めり一線の上に次の門次の門

川田順 (明治一五〜昭和四一)

第八歌集『鷺』(昭和一五年)より。川田順は茂吉と同年にあたり、信綱と親交が深かった。晩年の昭和二一年には当時の東宮御作歌指導役に就任するも、人妻との恋と自殺未遂にかかる騒動、いわゆる「老いらくの恋」で辞退した。近代を代表する心の花歌人という顔がある一方で、住友グループのトップという実業家の顔もある。多くの旅の歌があり、当該歌は伸びていく視点とリズムが心地よい。(御手洗)